

## 目次

はじめに	1
スリランカ	2
1. ジャフナの干物生産事業	
2. ムライティブのコミュニティ復興支援事業	
3. サリー・リサイクル事業	
4. デニヤヤ紅茶事業	
東ティモール	7
1. 森林保全と地域循環型農業	
2. 女性の経済活動支援	
3. コーヒー事業	
マレーシア	11
東北	12
東日本大震災被災者支援（石巻市北上町）	
1. 漁業復興支援	
2. 農業と農水産物の加工支援	
3. ツアーの誘致	
4. 復興応援隊	
フェアトレード	14
1. カフェ・ティモール	
2. アールグレイ紅茶	
3. ウバ紅茶	
4. アロマ・ティモール	
5. 復興支援商品	
ツアー	15
人と暮らしに出会う旅	
スリランカ／マレーシア／東ティモール	
情報発信力	16
1. WEBによる情報発信の強化	
2. 民際協力ニュースの発行	
3. 事業報告会	
4. イベントの参加	
5. 会員の拡大	
2013年度予算	17

## はじめに

パルシックは、その名（Interpeoples' Cooperation＝民際協力）の通り地球上の各地で暮らす人びとが国民国家の壁を乗り越えて、直接的に助け合う世界、同じ時代に共に生きる人間として、相互に支え合う道を目指しています。その同じ志から2011年3月11日の東日本大震災に当たって看過できないと、被災者支援を開始しました。結果として東北での漁村の復興支援を通じて多くのことを学ばせてもらっています。直ぐには見えませんがこのことは今後のパルシックの民際協力事業をより豊かにすることと考えます。

### コーヒーと紅茶を通じて人と人との出会いをより大きく

スリランカの南部、クジャクを初めとする鳥類が茶畑に舞い降りてくる美しい村々で農家50世帯が茶の有機栽培を行うことをパルシックは2011年から支援してきました。そして、その紅茶に有機栽培のベルガモットという柑橘で香りをつけた素敵なアールグレイ紅茶を今年から皆さんにお届けします。

他方、カフェ・ティモールは、すでに日本に輸入し始めてから10年、パルシックとして自分たちで販売するようになってからも5年が経過しました。カフェ・ティモールもアールグレイ紅茶もいずれも、飲んで頂いた方からは大変に美味しいという評価を頂いています。ですが、残念ながらまだまだ知られていません。カフェ・ティモールは、生豆でおよそ100トン、紅茶はティーバッグ、ティーリーフなどでおよそ2トンが日本に入荷します。生産者たちが丹精込めて生産したものです。このコーヒー、紅茶を一人でも多くの方に知って頂くこと、これが2013年度のパルシックの重要な課題です。

### 情報発信力

そのために必要なことは、パルシックの事業や事業地の農民たちの暮らしや環境についての情報発信を強化することだと思います。パルシック設立から5年間を経て、ようやく少しだけパルシックのことを知って頂けるようになりました。2012年にWEBのシステムが更新され、見やすくなりました。これを機にパルシックの事業や事業地についてもっと広範囲の方々を知って頂くための情報発信力を工夫していきたいと計画しています。

### 調査力

2008年から2012年までの設立後の5年間で、パルシックは民際協力事業を実施する基礎を作ってきました。それは人々の自立的で持続可能な暮らしと経済を成り立たせるような社会的企業あるいは連帯経済という分野にまたがる事業ですが、まだまだ手探りの部分も多くあります。次の5年間でそれをさらに深め広げていくために事業地だけではなくアジアの人々の動向に目配りしながら事業を行えるように調査力を強化したいと考えています。

多様な人々の多様なつながりによるネットワークとしてのパルシックが広がりを持ち、諸状況に敏感に反応する強みを備えられるようにしたいと切に願っています。

### パルシック理事会

井上礼子・中村尚司・清水 研  
鈴木直樹・永田洋子・穂坂光彦



## スリランカ民主社会主義共和国

【面積】 6万5,607平方キロメートル (北海道の約0.8倍)

【人口】 約2,028万人 (2012年3月現在)

### 【民族と宗教】

民族	シンハラ人	72.9%
	タミル人	18.0%
	スリランカ・ムーア人	8.0%
宗教	仏教徒	70.0%
	ヒンドゥ教徒	10.0%
	イスラム教徒	8.5%
	ローマン・カトリック教徒	11.3%

### 【略史】

- 1948年 英連邦内の自治領として独立
- 1972年 英連邦内自治領セイロンから完全独立、国名をスリランカ共和国とする。
- 1983年 タミル人との民族紛争激化
- 2002年 政府とLTTEとの停戦合意成立
- 2006年 東部そして北部での内戦の再燃
- 2009年 政府軍の圧勝による内戦終結

パルシクは2002年の停戦合意、2004年のスラバヤ沖地震による津波被害を受けて、スリランカ北部ジャフナでの活動を開始しました。2009年5月16日に望ましくない形でしたが、内戦が終結し、それからすでに4年近くが経過しました。が、北部のタミル人たちは、依然として軍部の圧力のもとで不安な暮らしを強いられています。ジャフナでは、住民が入れなかった「高度警戒地域 (High Security Zone)」の多くが解放され、住民たちは帰還して自宅の再建などを開始し、戦後復興に沸くスリランカ経済のなかに徐々に組み込まれています。しかしホテル建設などの開発事業はほとんどコロンボなどの資本や政権・軍部の息のかかった企業によって担われています。ジャフナの豊かな水産物は、冷蔵庫でコロンボにどんどん送られるようになりました。が、内戦や津波によって寡婦となった沿岸漁村の女性たちは、道路工事などに雇われることができたら幸運なくらいに今も内戦中と変わらない生活です。パルシクはジャパン・プラットフォームの助成を得て、2009年からジャフナを中心とする北部の緊急復興支援事業を行ってきました。2012年度からは内戦の最後の激戦地となったため破壊も著しく、住民の帰還もおくれたムライティブへ対象地域を移してきました。2013年度は、このムライティブで本格的な復興支援事業を開始します。





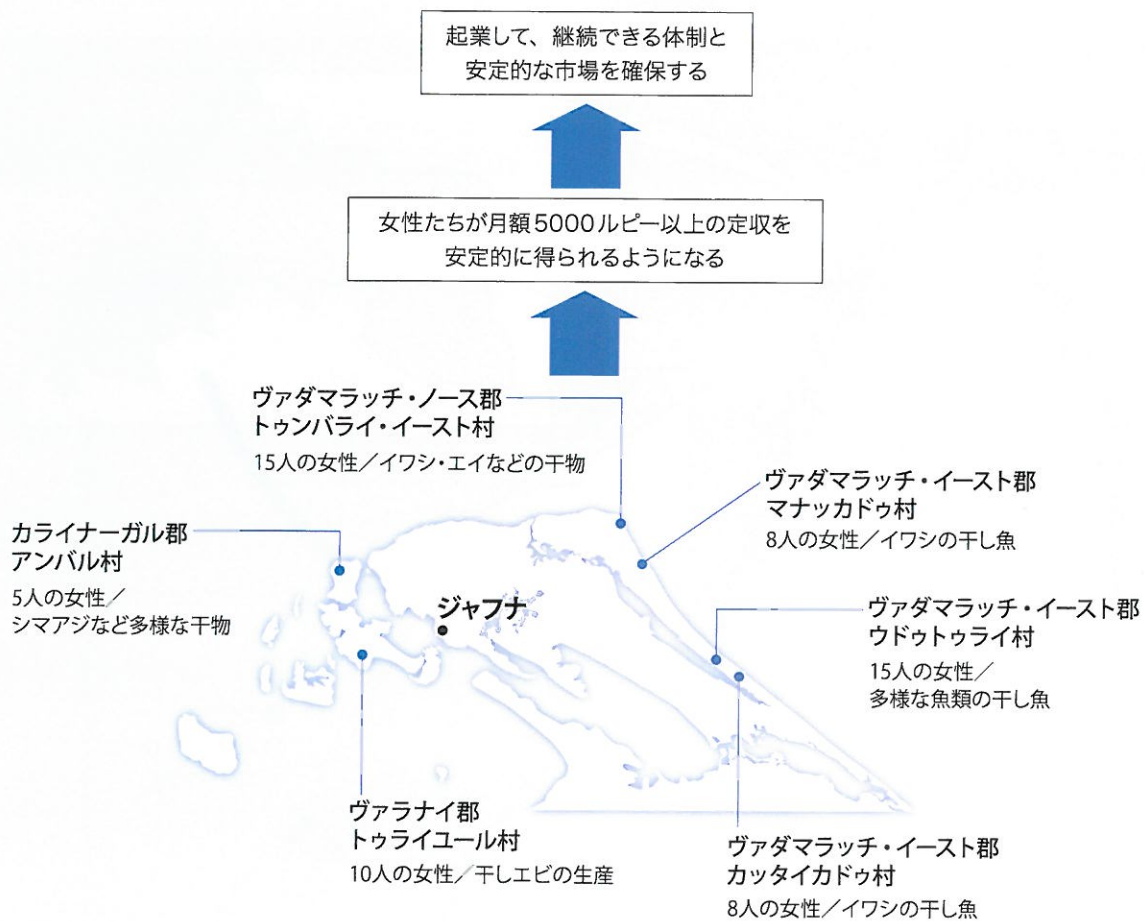
# 1. ジャフナの干物生産事業

2004年のスマトラ沖津波の復興支援として開始し、内戦を経て、2010年10月からJICAの草の根技術協力事業として本格的に取り組み始めた、ジャフナの女性たちによる干物づくりの事業は、2013年9月をもって、JICA草の根技術協力事業としては終了します。最終目的として、女性たちが定収を確保できるようにするのが9月までの目標であり、事業終了後、現地で漁協などと協力する企業を立ち上げ、この社会企業がパルシクの撤退後も女性グループと市場を媒介しながら持続的な発展を支援していくことを展望しています。

(この事業はJICA草の根協力事業として実施しています)



上：干しエビをつくる女性たち  
下：女性グループの店で販売する乾燥魚

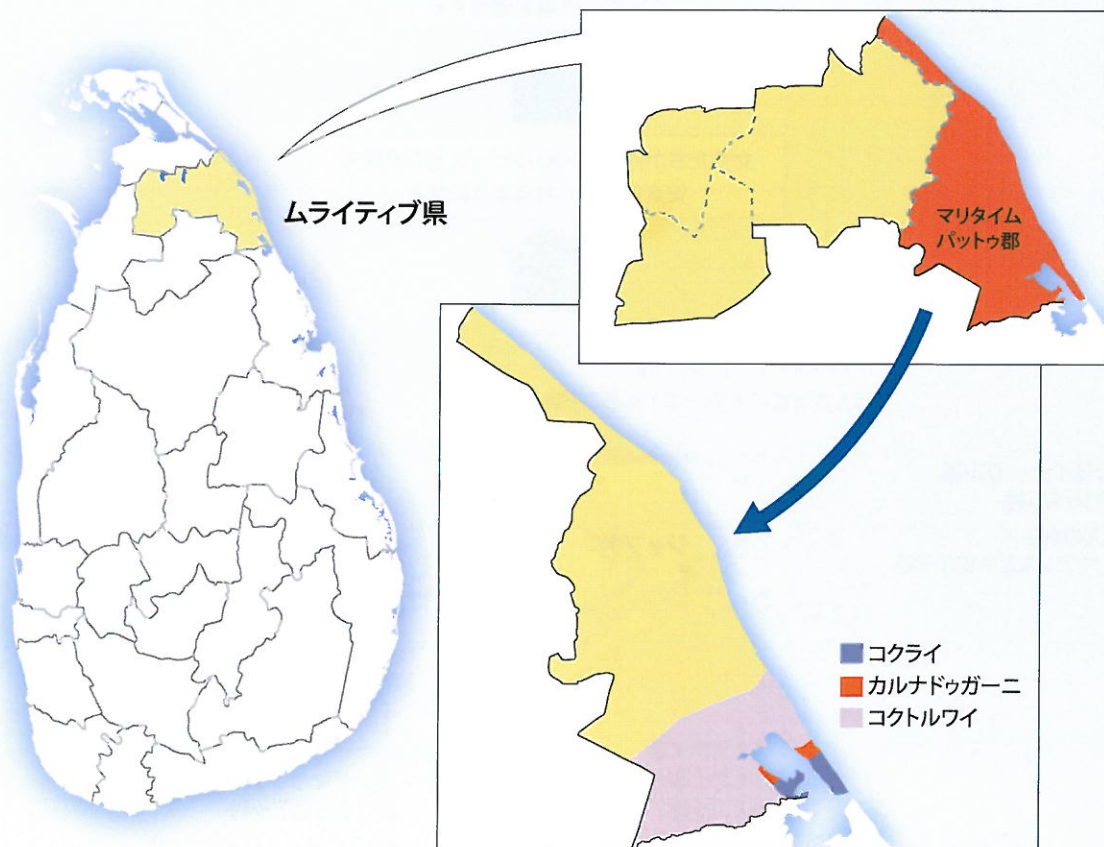
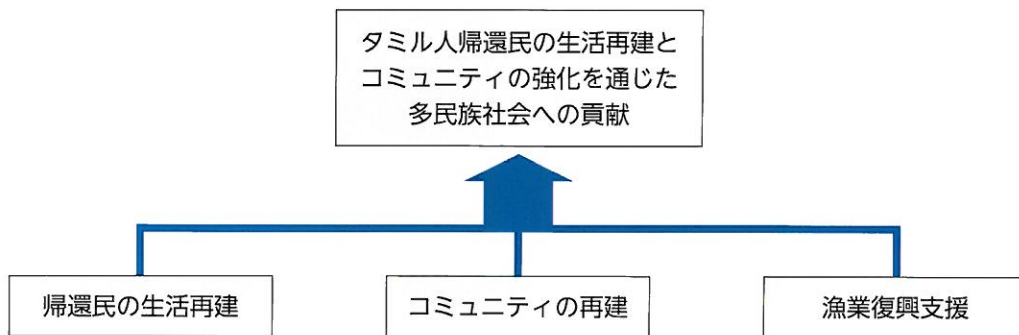


## 2. ムライティブのコミュニティ復興支援事業

内戦の最後の激戦地であり、もっとも多くの被害を被ったムライティブ県では帰還も遅れ、支援も少ないので戦争終結から4年経とうとしていますが、まだ内戦被害からの復旧もできていません。軍隊の存在も大きく、南部の多数派民族シンハラ人の入植も進められ、タミル人の住民は大変に不安定な状態に置かれています。パルシックは、今後3年間、ムライティブ県の海岸地帯マリタイムパットウ郡の3つの村（コクライ村、コクトルワイ村、カルナドゥガーニ村）で住民に寄り添いながら、生活とコミュニティの再建を支援します。具体的には次の活動を行います。

- ①まずは生活再建の一環としてきれいな水へのアクセスの悪い場所に共有井戸をつくって女性たちが1kmも歩いて炊事用の水を汲みに行かなくても良いようにします。
- ②村ごとにコミュニティー・ホールを建設し、そこでタミル人の子供もシンハラ人の子供も一緒に遊んだり、互いの言語を学んだりできるようにします。
- ③セリ場を建設し、漁業協同組合が組合員の漁獲物の販売管理などをできるように支援します。併せて沿岸水産資源の枯渇を防ぐためにも簡易な養殖の可能性を追求します。

(この事業は日本 NGO 連携無償資金協力の助成を受けて実施します)





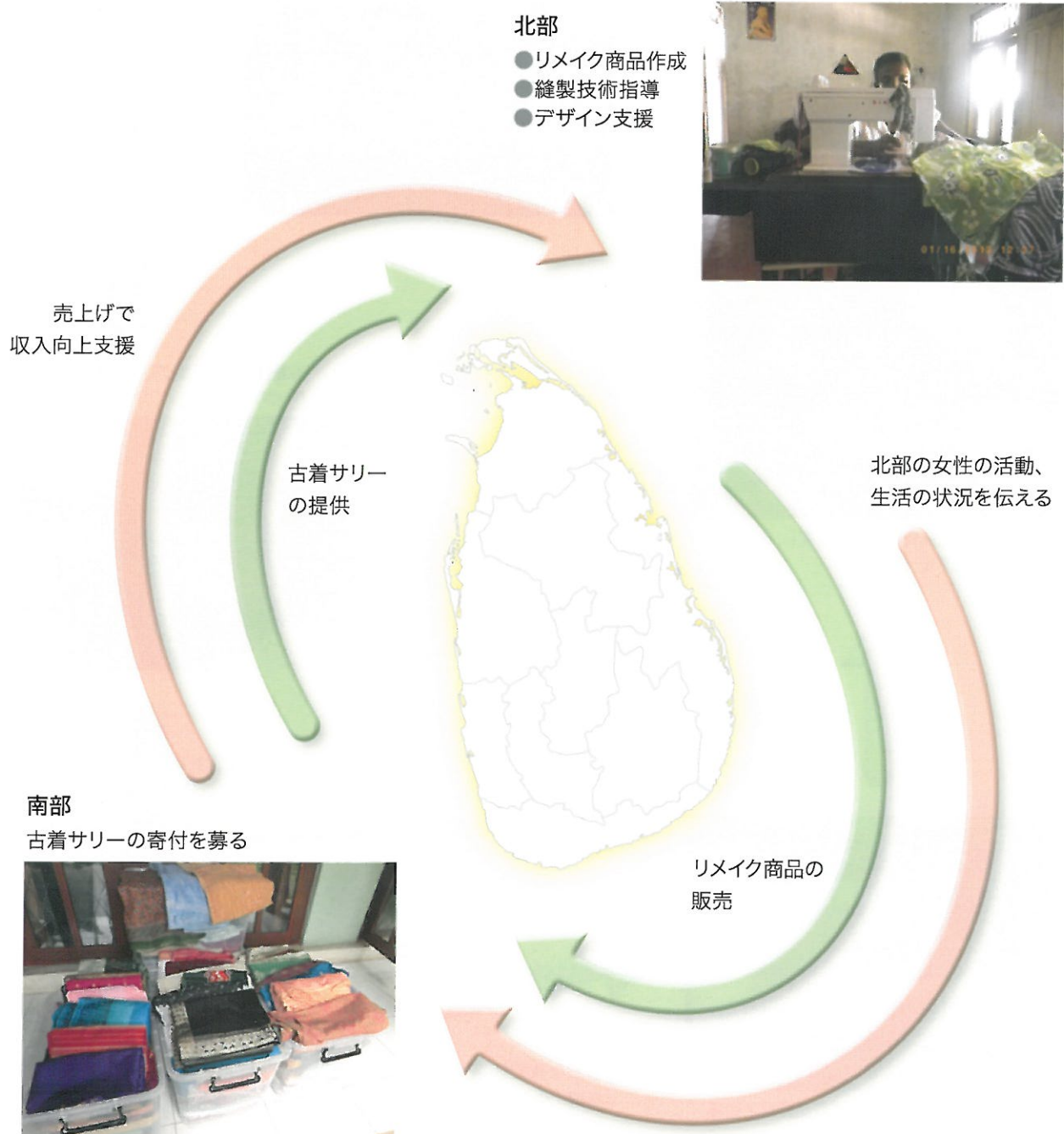
### 3. サリー・リサイクル事業

ジャフナ県やムライティブ県で津波や内戦で夫を失った女性たちに緊急支援事業を通してミシンを提供してきました。その女性たちに縫製技術を指導し、デザイナーにつくってもらった型紙を使って、おしゃれなチュニックやバッグなどをつくります。材料の布地はコロンプを初めとする南部の富裕層の女性たちがタンスの肥やしにしているサリーを寄付してもらいます。できた製品は、コロンプの洋品店、土産店などで販売します。

この事業は内戦の現実についての情報をほとんど得て

いない南部の女性たちと、今も内戦の結果に苦しめられている北部の女性たちに、サリーのリサイクルを通じて、つながりをつくりだし、相互理解と平和構築に寄与することを目的としています。2012年度は、デザイナー探しや、古着のサリー集めという準備を行ってきました。2013年度には本格的な生産を開始する計画です。一定数以上の製品ができればフェアトレード商品として日本に輸入することも検討します。

(この事業の一部は国際協力NPO助成の助成を受けて実施します)



## 4. デニヤヤ紅茶事業

スリランカ南部州、セイロンサンジャクなどの鳥類や昆虫などスリランカ固有動物種の50%以上が生息するシンハラージャ森林保護区に隣接するマータラ県コタポラ郡デニヤヤ市の農村で2011年から、茶葉栽培の有機転換事業を開始しました。2012年度、紅茶の製品化にこぎつけました。2013年度は、これまで50世帯からなる共同出荷グループを組織して行ってきた事業の規模

を地域内に広げ、有機肥料作りのための牛や資材を提供し、牛の糞による肥料作り、ミミズの利用、適切な施肥方法などの土壌改善技術指導を行います。生産する茶葉の質の改善を通じた収支の改善も課題です。この茶葉を、近隣の協力工場で加工して紅茶とし、天然のベルガモット・オイルで着香して、アールグレイ紅茶として日本に輸入します。2013年度の輸入量は2トンになる予定です。







**東ティモール民主共和国**

【面積】 約1万4,900平方キロメートル（四国のおよそ80%）

【人口】 約118万人（2011年）

【民族】 大半がメラネシア系。その他マレー系、中華系等

【言語】 テトゥン語とポルトガル語が公用語

15前後の地方語があり、世代によって異なる言語教育を受けており言語問題は独立東ティモールにとって重要な問題

【宗教】 キリスト教99.1%、イスラム教0.79%

**【略史】**

16世紀前半	ポルトガルによる占領
1942年	日本軍による占領
1945年	ポルトガルによる占領の回復
1975年	フレテリンによる東ティモール独立宣言の後、インドネシア軍が東ティモールに侵攻し制圧
1999年8月30日	独立をめぐる住民投票の結果、78.5%がインドネシアからの分割を望み、その後インドネシア軍と民兵による住民殺戮
1999年9月20日	オーストラリア軍を中心とする平和維持の多国籍軍（東ティモール国際軍、INTERFET）が上陸
2002年5月20日	東ティモール民主共和国独立（主権回復）
2006年	国軍兵士による差別待遇改善要求のデモをきっかけに、動乱。豪、ポルトガル、NZ、マレーシアが国際治安部隊を派遣。国連安保理は、国連東ティモール統合ミッション（UNMIT）の設立を決定
2012年12月31日	UNMITの任期終了

パルシックは、1999年の緊急時に他の多くの日本のNGOと協力して東ティモールにおける支援を開始しました。

2002年の独立時から東ティモールの主産業であるコーヒーの品質改善と生産されたコーヒー生豆を日本に輸入するフェアトレードの取り組みを始めました。それから10年が経過しました。首都ディリは、10年前の姿からは大きく変わりショッピングモールができ、新車が走り、きれいなホテルやレストランもできました。が、コーヒー生産者の住む山間部農村では今も電気も水道もない貧しい暮らしは変わらず、若者たちは農村を捨てて都市に住むことを望みますが、産業の発展のない中で都市でも若者の就労は困難で、それが緊張の火種となることも懸念されています。2012年度からパルシックの東

ティモールでの活動は、次なる10年間にわたる新しい段階に入り、東ティモール全域を対象に以下の活動を実施します。

第一には、アグロフォレストリー事業を軸に、東ティモールの山間部農村地域の循環型農業の発展に本格的に取り組めます。またこの事業を、従来から行ってきた女性の食品加工事業、コーヒー事業とも連動させます。

第二には、活動地域を、10年間コーヒー生産者支援事業を展開してきたアイナロ県マウベシ郡だけではなく、東ティモール全国に広げていきたいと考えています。

そして第三に、以上の活動をできるだけ現地の住民組織、NGOとの協力の中で、ネットワークをつくりながら実施します。



## 1. 森林保全と地域循環型農業

東ティモールを初めて訪れた人は、山間部でも土壌が貧困で木々が少ないことに衝撃を受けます。アイナロ県の山間部では見える範囲の林はほとんどすべてコーヒーの木とその日陰樹です

### ①養豚事業

1世帯4頭の豚を飼えるように豚の仕入れ代金を希望者に貸付、並行して養豚から収益があがるようにします。

### ②林産特用物による収入増

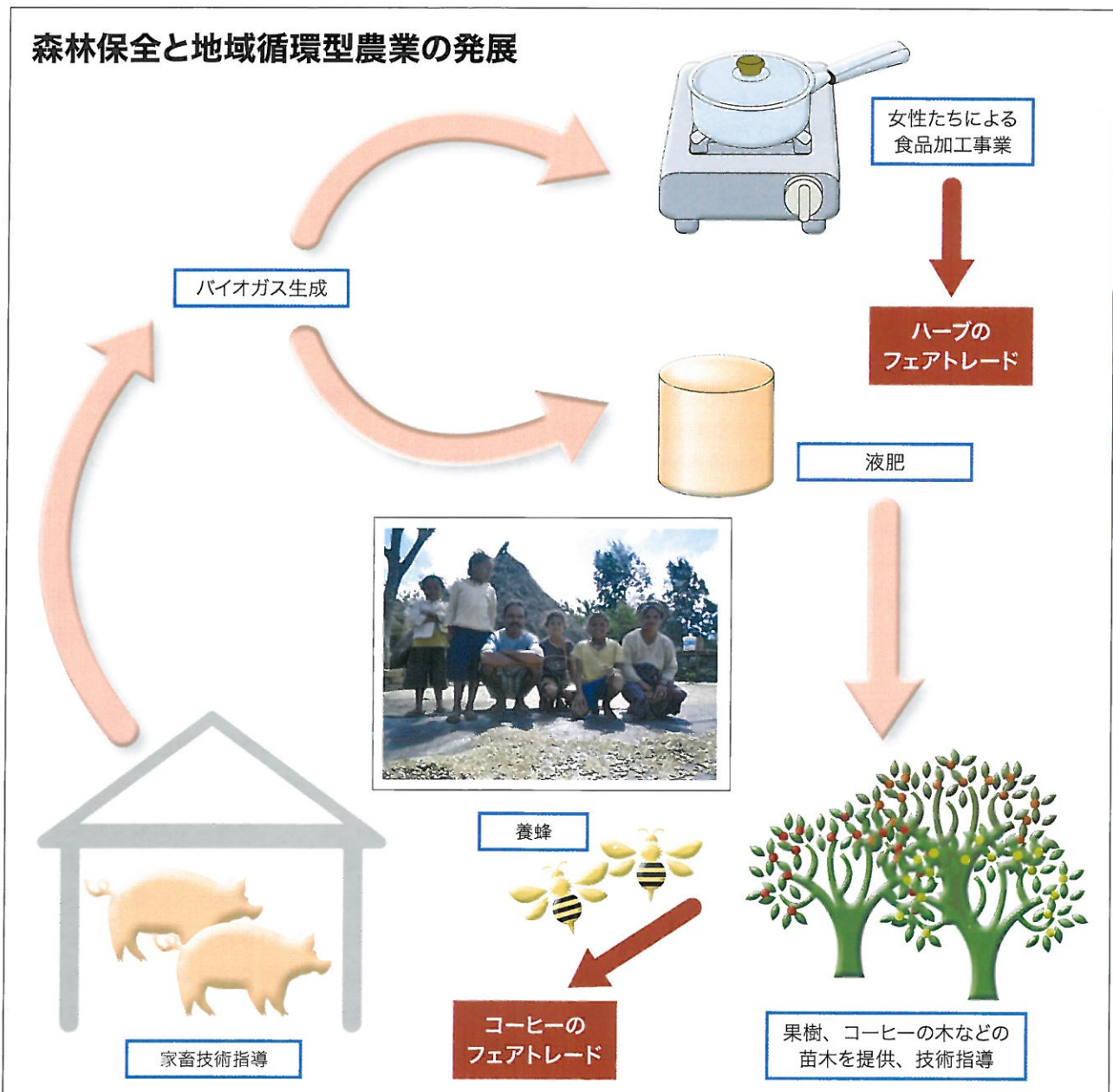
果樹やコーヒーの木の苗木を配布し、各農家に20-30本の苗木を植えて、森林面積の拡大と果樹による所得の向上、コーヒー畑の改善を目指します。併せてまだ東テ

ィモールでは行われていない養蜂にもチャレンジしてみたいと考えています。

### ③バイオガスやロケットストーブの導入

2013年度はいよいよ小型バイオガスプラントを各農家に設置する段階に入ります。マウベシ郡ではどの農家も祭事に供する財産として1~2頭の豚を飼っていますが、バイオガスへつなげるためには、世帯当たり4頭以上を飼い続けなければなりません。家畜から現金収入を得、糞からエネルギーと液肥を生成できるようにしたいと考えています。液肥はコーヒーや果樹の苗木の育成に使用します。

(この事業は日本 NGO 連携無償資金協力の助成を受けて実施しています)



## 2. 女性の経済活動支援

2010年から開始したアイナロ県マウベシ郡の女性グループ、ハノイバオイン Hanoi-ba-oin (テトゥン語で「前向きに考えよう」の意) の食品加工は、ハーブやはちみつの生産が軌道に乗っています。生産量を増やし、品質を向上させて国内市場と国際市場での安定した販売を強化します。

他方、東ティモール各地に地場産品の加工をしている女性たちのグループがあり、それぞれが包装資材や市場へのアクセスなど同様の困難を抱えているので、女性グループ同士の交流、ネットワーク化を促進して、共同して問題解決に当たれるように支援していく計画です。2013年10月から JICA 草の根協力事業パートナー型による支援を5か年間受けられることになりましたので、東ティモール全国の新しい女性企業のネットワークづくりとしてチャレンジします。



上：パイナップルのジャムをつくる女性グループ  
下：自分たちの製品の説明をする女性

### マウベシ郡内での女性グループの現状



ハノイバオインの集落別産品

集落名	産 品
リタ/リティマ	サツマイモチップス ハーブ
レボテロ	サツマイモチップス ハーブ
ロビボ	サツマイモチップス ハーブ
ハビタリ	ハーブ
ルスラウ	ハーブ
ハトゥッカデ	ハチミツ、ハーブ



## 3. コーヒー事業

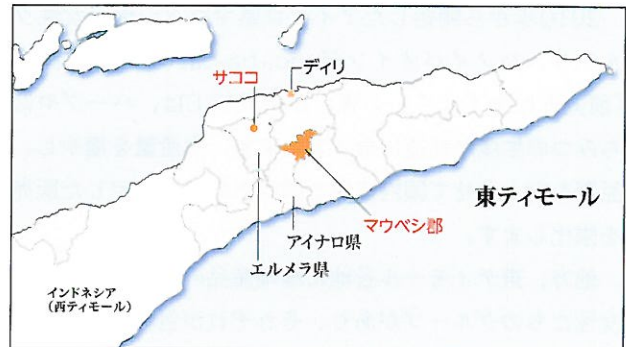
### マウベシ

アイナロ県マウベシ郡のコーヒー生産者302世帯がつくる協同組合ココマウ（COCAMAU）によるコーヒー生産の支援は10年を経て、ココマウの自立の道を歩み始めています。2013年には次の5点において支援を継続します。

- (1) コーヒーの苗木配布による畑の改善
- (2) コーヒーの一次加工における品質管理
- (3) 各集落からの配送
- (4) コカマウ役員たちへの組合運営に関する研修
- (5) フェアトレードとしてのコーヒーの買い取り

### ココマウの集落別組合員数

村	集落	組合員	準組合員	合計
アイトット村	クロロ	19	26	45
	マウレフォ	19	16	35
	ベトゥララ	5	9	14
マウベシ村	レボテロ	9	13	22
	リティマ	10	9	19
マネットゥ村	ルスラウ	7		7
	ハヒタリ	15		15
	マウライ	36		36
	レブルリ	15		15
	ケリコリ	22		22
マウラウ村	リタ	40		40
	ルムルリ	42	23	65
	ハトゥカデ	24	9	33
エディ村	ロビボ	6	7	13
	タラレ	33		33
計		302	112	414



### サココ

エルメラ県エルメラ郡ポニララ村サココ集落という、標高約800メートルの山間部に位置する人口1000名ほどの集落では、コーヒー生産者44世帯がKJHR (Klibur Juventube Haburas Rai=土地を生き生きさせよう青年団) という生産者協同組合を組織しています。彼らが集落内の農民とともに生産するロブスタ種というコーヒー豆を、フェアトレードとして購入し、組合活動支援を行っています。

サココ集落は雨季に入ると車両で進入できない悪路の先にあり、医療施設が遠いために妊産婦や児童が死亡するケースが年間に10件くらい発生しています。2013年にはこのロブスタ豆の購入先から提供されるフェアトレードプレミアム資金を利用して、モバイル・クリニックのための設備を提供する計画です。

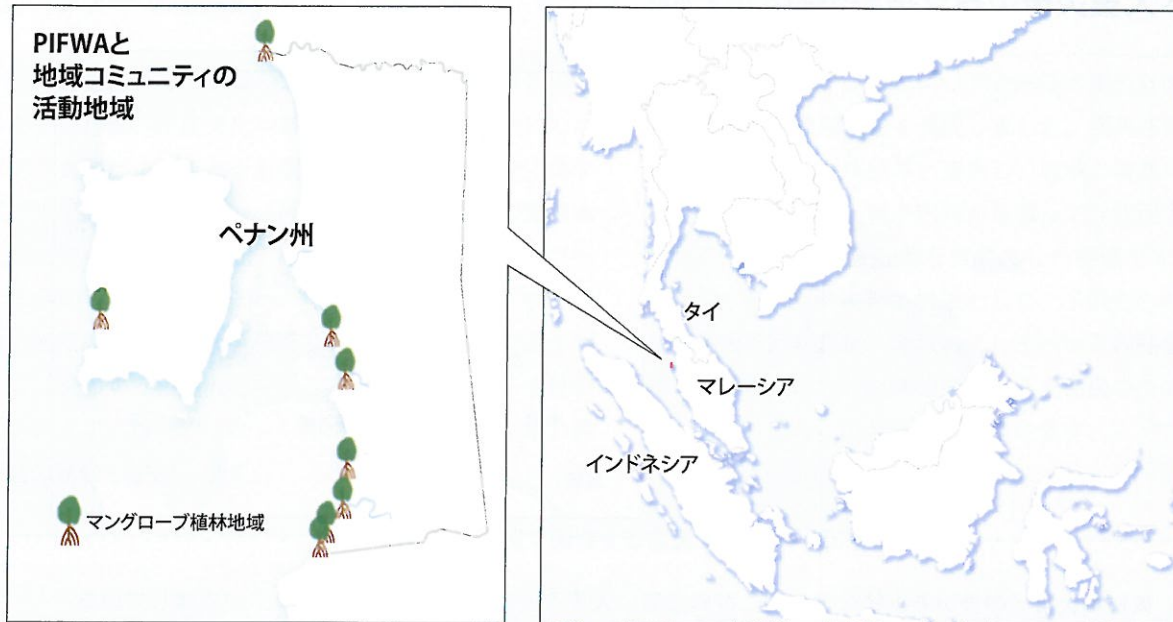


COCAMAU 組合長 Alfredo Mains さん (右端)



コーヒー畑を案内する KJHR 代表 Amaro さん





## マレーシア

【人口】 2,860万人 (2011年)

【面積】 約33万平方キロメートル (日本の約0.9倍)

【民族】 マレー系約67%、中国系約25%、インド系約7%

【宗教】 イスラム教 (連邦の宗教) 61%、仏教20%、  
儒教・道教1.0%、ヒンドゥー教6.0%、キリスト教9.0%

## 【略史】

15世紀初頭	マラッカ王国成立
1824年	英国による植民地支配
1942年	日本軍による占領
1948年	マラヤ連邦独立
1962年	マレーシア成立
1965年	シンガポールが分離独立

ペナン島は長らく対岸のクダ王国のスルタン (君主) の領地でしたが、1786年に英国領となりました。ここは香辛料交易に関わる商人たちの船の補給港でもあり、多くの人々の行き交う交易の中心でもありました。日本占領期を経て、1948年に英国から独立した後、マレーシアの一員となりました。島と半島の西海岸の一部からなるペナン州の人口は約150万人で、中国系の割合が多く、この中国系人口が商業活動をにぎってきました。中心地のジョージタウンに残る英国時代からの歴史的町並みはユネスコの世界遺産に指定されており、海岸リゾートとともにマレーシア隋一の観光地となっています。80年代にエレクトロニクス製造産業を誘致し、アジアでも有数の生産額を誇るまでになると経済の基礎を交易から工業へと転換し、1985年にペナン・ブリッジが開通して島と対岸との行き来が容易になり、経済開発に一層の拍車がかかりました。こうした急激な変化は、マングローブ林の喪失、沿岸海域の汚染、水産資源の枯渇をもたらし、政府の遠洋漁業推進政策もあって、主としてマレー系住民によって担われている沿岸小規模漁業の成立が困難となってきました。

沿岸漁民による PIFWA (Penang Inshore Fisher-

men's Welfare Association = ペナン浅海漁民福利協会) という組織は、自分たちでマングローブを植林するなど水産資源の保全を図っており、パルシックは2010年度から PIFWA への支援を行ってきました。マレーシアの事業は、人と人との出会いと交流を重視していきます。2013年度は以下のことを行う計画です。

1. ペナン州各地の沿岸漁民に PIFWA の活動を広め、それぞれの漁村でマングローブ植林を行えるように、各漁村でのワークショップを行う。
2. PIFWA および他の沿岸漁民が行う植林活動に、マレーシアおよび日本の市民や学生、企業の参加を促し、ペナン州内でのマングローブ植林地域の規模を拡大し、ペナン州沿岸地域における水産資源復活への一助とする。
3. 活動のホームページを作成し、マレーシア国内外に活動を広報し、アジア各地の沿岸漁民および市民に水産資源保全活動への参加を促す。

(この事業はイオン環境財団とりそなアジア・オセアニア財団の助成を得て実施します)



# フェアトレード

パルシックは、東ティモール、スリランカ、マレーシア、東北などで行っている民際協力事業の一環として、その生産物を市場につなげる活動としてのフェアトレードを行っています。2013年度はこの分野を一層拡大していくことが課題です。

## 1. カフェ・ティモール

2013年度も、コーヒー豆は豊作となりそうというニュースが伝えられています。2012年度同様、およそ100トンの収穫が予想されるので、販売に力を入れます。およそ、80トンは生豆としての販売で、15トンを目標に以下の商品として販売していきます。

### (1) 生豆の小売り販売

ご自宅で、じっくりコーヒーを自分で焙煎して、楽しむという消費者のために、焙煎道具とセットで販売します。

### (2) 粉豆

2007年以来の定番商品ですが、2012年度から開始した食品店などへの卸売りのための営業に力を注ぎます。

### (3) ドリップコーヒー

ちょっと一人で仕事をしながら一杯のコーヒーを飲みたいときや、旅行先で気軽に楽しめるドリップスタイルのカフェ・ティモールを、もっと多くの人に知ってもらえるような広報を行っています。

### (4) リキッド

重厚な味わいがあり氷を入れても美味しく味わえるのですが、賞味期限が短いので、今年は早めに販売に取り組みきちんと売り切るようにしたいと思います。



## 2. アールグレイ紅茶

2013年度の新商品です。デニヤヤの農家のおじさんたちが、苦労して有機栽培に転換したルフナ紅茶を、有機のベルガモット（柑橘類）で着香した薫り高く、甘みのあるアールグレイ紅茶を、より多くの皆さんに届けるために、今年はコーヒーと並んで、この営業に力を入れ

ます。このアールグレイ紅茶を通じて新たな人々との出会いをつくりだすために尽力します。



## 3. ウバ紅茶

パルシックの定番商品で、スリランカ国ウバ州のグリーフィールド農園から買っています。飽きの来ない豊かな味わいで、ファンの方もついているので2013年度以降も引き続き販売する計画です。



## 4. アロマ・ティモール

東ティモールの女性グループ、ハノイバオインが摘み取り、丹精込めて乾燥させたハーブティーは2012年度に初めて商品化して輸入。現地でパルシックの担当職員がしっかり品質管理をしています。今年は、安定した生産で輸入数量を増やし、輸送などのコストを抑えることを計画しています。種類はまだ次の3種類だけですが、順次、増やしていきたいと考えています。

- バジル
- ツボクサ&ミント
- アボカドリーフ&ライムリーフ



## 5. 復興支援商品

東日本大震災被災者復興支援の一環として、北上町の美味しい塩蔵ワカメや福島の女性たちがつくった「にこまるクッキー」(チームむかご製)の販売を続けます。



## 人と暮らしに出会う旅

パルシックは人と人との直接的な交流を重視することから、国内外のツアーを積極的に行います。これはパルシックの活動を理解し、共感してくださる人のすそ野を広げることでもあります。

**美味しい紅茶の故郷を訪ねる旅**

スリランカ マータラ県

開催時期：2013年12月26日～

2014年1月2日

「セイロンティー」として世界に親しまれる紅茶の産地スリランカで、紅茶の有機栽培に取り組む小規模農家のグループを訪ねます。独特の甘い香りが特徴の「ルフナ紅茶」の産地デニヤヤ。世界遺産にも登録される熱帯雨林のすぐ近くで、堆肥を自ら作り、茶葉を有機で栽培している農民たちがいます。美味しい紅茶ができるまでの行程、そこで暮らす人びとの生活に触れる旅です。

**内戦後のタミル漁村を訪ねる旅**

スリランカ ジャフナ県・ムライティブ県

開催時期：2013年8月18日～25日

2009年、26年間におよぶ内戦の終結を迎えたスリランカ。戦場となった北部州の多くの地域は、少数民族のタミル人が暮らしており、現在、避難を余儀なくされていた人びとの暮らしの再建が進んでいます。戦前にはスリランカ第2の都市として栄えたジャフナと、戦争末期まで戦場となったムライティブを訪ね、復興に取り組む漁村の人びとと触れ合い、スリランカの戦後復興について考える旅です。

**漁民とともにマングローブを植える旅**

マレーシア ペナン州

開催時期：2013年9月1日～7日

美しい街並みと多様な文化が世界遺産に登録される街ペナン。リゾート地として有名ですが、急速な沿岸の開発や排水による水質汚染が進んでおり、環境保全の重要性が高まっています。この旅では環境保全に取り組む漁民団体を訪ね、マングローブ植林を体験します。

**フェアトレードコーヒー生産者を訪ねる旅**

東ティモール アイナロ県

開催時期：2013年8月3日～11日

2002年の東ティモール独立時からパルシックが生産支援を行っている、アイナロ県マウベシ郡のコーヒー農家を訪ねます。実際にコーヒー豆の収穫、加工を手伝い、コーヒー農家のお宅に泊まり、農民と直接触れ合いながら、私たちが飲んでいるコーヒーができるまでをたっぷり知ることのできる、貴重な旅です。



情報発信力をさらに強化し、多くの方にパルシックを知って頂くことは2013年度の重要な課題です。東京事務所では、2012年度にCMS（コンテンツ管理システム）化されたWebサイトとSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）・メールマガジンを連動させ、広報活動の強化に取り組んでいきます。

## 1. WEBによる情報発信の強化

2012年、パルシックのホームページをCMS（コンテンツ管理システム）化し、サイト全体のデザインが統一され見やすくなると同時に、ブログも組み込まれ、情報の更新が容易になりました。2013年度は、これを利用して東ティモール、スリランカ、東北から情報を迅速に発信するようにします。FacebookやTwitter、mixiなどの情報発信ツールや、定期的なメール配信との連動もひきつづき活用し、読みやすく、楽しいページを作ってアクセスの増加を目指します。

2012年度にJICAアドバイザーの派遣による広報力アップの指導を受けました。その際に習得したWeb広告の手法、解析ツールの分析手法などを応用し、効果的な広報を行っていきます。

## 2. 国際協力ニュースの発行

パルシックの発足以前から年に2回発行して、事業地の様子をお伝えしてきました。今後も見やすい、読みやすい紙媒体のニュースの発送も6月と12月の年2回継続し、サポーターの拡大につなげます。

## 3. 事業報告会

事業の進捗状況や現地で直面した問題などを詳細にお伝えできるように、必ず年に一度は事業報告を行います。

## 4. イベントの参加

2012年度は33回のフェアトレード・国際協力関連イベントやマルシェに積極的に参加しました。しかし、イベントへの参加はスタッフにとってかなりの負担となるため、2013年度は選択して、効率よく広報活動が行えるイベントに参加するように工夫していきます。

## 5. 会員の拡大

日々の活動を通じて、パルシックの活動を幅広く伝えていくとともに、パルシックの正会員、賛助会員（団体）、サポーターズを積極的に募っていきます。



# パルシク 2013年度予算

